

棚尾地区まちづくり事業
平成28年4月28日(木) 19時～
棚尾公民館3階

第52回 棚尾の歴史を語る会 次第

- 1 前回までのテーマに関する参考意見
名鉄臨港線大浜口駅、大浜臨港線運送株式会社、毘沙門天・妙福寺など
- 2 テーマ84 光輪寺
説明(磯貝国雄)
出席者による補足説明、感想など
- 3 連絡事項・情報交換など
- 4 次回日程
第53回棚尾の歴史を語る会 5月26日(木) 19時から
テーマ「棚小校門の沿革」「まちの石積み」

「光輪寺」

1 要旨

光輪寺は大きな屋根の本堂や門構えなど棚尾の中心にある立派なお寺であると同時に多くの輝かしい歴史を持っている寺院である。

明治維新では新政の重要な役目である教諭使を務めたお寺であった。又、浄土真宗の宗教改革運動では大いに活躍し、貴重な文献を残している。一方、俳句の巨匠高濱虚子が訪れ、棚尾俳壇を全国へ広めるのに貢献するなど、歴代住職はこの地方の文化的指導者が多い。

2 歴代住職

宗派は浄土真宗大谷派に属し、解脱山光輪寺と称する。本尊は阿弥陀如来。宗祖は親鸞聖人で、本山は東本願寺である。

歴代住職の系図は次のとおりである。

開基	休無
二世	良円
三世	賢了
四世	円盛
五世	利慶
六世	恵空
七世	玄道
八世	賢立
九世	謙敬
十世	晃敬
十一世	真敬
十二世	真正

3 沿革

西暦	和 暦	事 項
1468	応仁 2 年	往昔、天台宗の霊場で棚尾総道場であった。 蓮如上人が三河地方巡化のおり、深くその教えに帰依し、浄土真宗に転宗。上人より六字の尊号・染筆を賜る。
1661 ~ 1672	寛文年間	碧海郡吉浜の郷士安藤某、出家得度して休無と号し、当道場を再興。浄土真宗総道場と称し、開基となる。
1687	貞享 4 年	二世良円 8 月 2 日、木像のご本尊（現在の御内仏の本尊）を安置する。
1702	元禄 15 年	三世賢了、解脱山光輪寺と改称し、真宗寺院の形を成す。
1709	宝永 6 年	親鸞聖人御影の御下附。
1716	享保元年	聖徳太子・七高僧御影の御下附。
1790	寛政 2 年	9 月 六世恵空、鐘楼の建立。但し、鐘は太平洋戦争の時供出し、現在の鐘は小澤実太郎氏の寄進
1805	文化 2 年	親鸞聖人御絵伝の御下附。
1814	文化 11 年	2 月 8 日蓮如上人御影の御下附。
〃	〃	11 月 七世玄道本堂表門（薬医門）の修復。
1826	文政 9 年	七世玄道、9 月本堂を再建。 八世賢立、本堂に合せ本山より現在の御本尊木造阿弥陀如来立像の御下附を受ける。
1840	天保 11 年	8 月六本柱の水屋の建立。山中某氏の寄進
1850	嘉永 3 年	施主釈堅正・俗名荘助氏（現在の永坂里嗣家）の寄進により経蔵が建立され、一切経が奉納される。明治 30 年十世晃敬の時、修復され現在に至り、毎年夏に虫干会として一切経法要が厳修される。
1868	明治元年	茶席「蔵六庵」を高木家が田嶋家から買い求める。
1870	明治 3 年	八世賢立教諭使に任命された。
1896	明治 29 年	十世晃敬 革新運動日誌を書く。
1917	大正 6 年	十一世真敬 幼稚園を設立する。
1920	大正 9 年	〃 日曜学校を開設する。

1922	大正 11 年	12 月 20 日 高浜虚子が光輪寺を訪れる。
1928	昭和 3 年	9 月 29 日 高浜虚子が 2 回目の来棚。
1929	昭和 4 年	農繁期託児所を開設する。
1932	昭和 7 年	国道拡幅に伴う庫裏の移動により幼稚園は休園する。
1974	昭和 49 年	11 月 薬医門の屋根を葺き替える。
1975	昭和 50 年	10 月 ご本尊が碧南市の有形文化財に指定された。
1978	昭和 53 年	5 月 高木二九の句碑を建立する。
1987	昭和 62 年	5 月 古久根与一、たけ夫妻が寺標を寄進する。
1992	平成 4 年	4 月 26 日 本堂が修復され、会館が新築される。

4 ご本尊

碧南市指定文化財

木造阿弥陀如来立像 一軀

指定年月日 昭和 50 年 10 月 15 日

形状 高さ 82cm 寄木造り

所在地 棚尾本町 1 丁目 48 番地

左足を前に出した構成は鎌倉様式が出ている。顔は品格があり安阿弥様（快慶）の作と称せられる。安慰印（来迎印）で光背は放射光である。落剥はなほだしく右指三本、左指二本が損傷しており補修のあとがみられる。台座は新しく華美であって後の作であろう。

広報へきなん 昭和 44 年 11 月 15 日 426 号の表記

碧南の文化財 阿弥陀如来像

この仏像は光輪寺の御本尊で檜の寄木造。身丈二尺七寸安慰の仰（来迎印のこと）を結ばれて、御顔お胸等落剥がはげしい。寺伝には安阿弥（快慶）の作と伝えられている。右の指三本と左の指二本とが欠損、後補あとが見えている。補修は素人の作らしいが惜しいことである。蓮座より上部と台座とは別時代の作の样に見受けられ、光背は放射光で左足を少々前に出し、動的な御姿で誠に近親感のもてる仏様である。

願主は吉蔵とだけ寺伝にあり、市史第一巻によれば江戸時代に寺々の頼母子講

のあったと同様吉蔵頼母子講があったことが見えている。

この寺の本堂は文政9年の再建であった。この本尊の来寺は天保14年4月八世賢立代と伝えている。元は京の本山に祀られていた時代があって、その頃龜山帝の御帰依が厚くこの尊像を同寺に受けるに際し、前机並びに三ツ具足を御下賜頂いたとの事で、その前机、三ツ具足は元京の紫寇殿に使用されたものであると伝えている。

5 建造物

(1) 本堂

文政9年9月住職玄道の時代に本堂を再建。平成4年(1992)4月修復。

文政時代の棟札(1)の表面

維時 文政九丙戌年
奉再建御堂 解脱山光輪寺第六世玄道
秋九月下旬
釈尼妙信
釈尼妙浄
釈 浄信 当国賀茂郡矢並村 俗名角谷伊八事
惣同行中 旦那惣代文七
世話方源右衛門

文政時代の棟札(1)の裏面

西山市右衛門 // 杓右衛門 // 権太郎 善十 半七 半十
条介 兵吉 善七 文八 弥吉 惣太郎 林四郎
戊正月十七日ヨリ地築始メ 同二月廿四日築止 五月経立ニ懸リ 八月下旬
マテ屋根瓦葺止
此歳米兩テ六斗八升致シ申候以上 酒壺升百五十文也

文政時代の棟札(2)の表面

丙文政九年 天下泰平 棟築 鈴木嘉吉郎光重
奉敬御棟札

国家安全 戌九月吉日 棟築 岡嶋忠右衛門定治

鈴木嘉平一頭	杉浦彦兵衛	石橋定吉	瓦屋半重郎
榊原繁助	小田増太良	都築政吉	同小三郎
杉浦常助	鈴木圓蔵	杉浦重助	
同 嘉蔵	新美宇平		木挽清右衛門
岡嶋忠助矩早	鈴木重右衛門		
同 五兵衛	松山吉重	山口勝蔵	車刀長右衛門
同 松助	尾崎常助	松山嘉助	左官金四郎
鈴木谷右衛門	杉浦宇兵衛	生田常助	同 傳助

※ 文政時代の棟札（2）の裏面は記載無し

平成時代の棟札の表面

平成四年

奉本堂修復 解脱山光輪寺第十二世釋真正代

四月二十六日

棟梁	半田市亀崎町	石川邦男
屋根	碧南市弥生町	永坂鉄二
内障	碧南市志貴町	小笠原宏
左官	碧南市善明町	永坂松男

※ 平成時代の棟札の裏面は割愛

(2) 経蔵

中江の筆庄（ふでしょう）と言う人の一寄進による。四間四方で、内部は総檜造りの立派なものである。

(3) 茶席

碧南には三つの名茶席があったと言う。高浜の田嶋家より光輪寺に移ったものと伏見屋の市古家より西方寺に寄進されたものと、新川久沓の市古家のものである。

光輪寺の茶席は「蔵六庵」と称し、石州流の名手で茶料十万石持参と噂された刈谷城主金次郎（仙台より養子）の設計である。山岡鉄舟筆「如亀蔵六」の扁額は、この茶席の何か関わりがあろう。昭和6年道路拡張のため水屋を失い、茶席は本堂に続くようになった。昔は、小庭園に囲まれ、侘びがあったと言う。

碧南文化 昭和 37 年No.62 の表記

「蔵六庵」 高木二九

蔵六庵は光輪寺の新書院の西、本堂の庇の下におしこめられて居ります。が、もとは銅ぶきの屋根で文久の戊辰、無風流だとして、そぎ葺に改められ、明治元年田嶋家改革のせつ高木家がい求めたるもので、その後明治30年大修復を加えたるも、小庭に向き独立して居たところ、昭和6年国道に少々ながら土地を撰取せられ、止むを得ず、現在の位置となりました。

この席は天保戊辰年田嶋家の創設にて、刈谷城主金次郎様これは仙台様の次男で、石州流の宗匠であり、茶のため十万石という御持参であったと伝えられます。案ずるに、刈谷に養子されたのは、戸田の二代目であって、金次郎様とは称せられなかった。

この庵に付いて来ましたのは、

- 手水鉢 一 四方仏石造 (旧時貴人の納骨用)
- つくばい 一 御影石 (金二郎殿より拝領品)
- 沓ぬぎ 一 鞍馬石
- 飛石 一 白川石
- 炉ちびつ 一
- 炉ぶち 一
- つりくさり 一
- 畳 夏冬用 七

以下省略

6 明治維新で活躍した八世賢立

(1) 高木賢立プロフィール

昭和 63 年 碧南市発行の少年少女向け偉人伝「へきなんの人と自然」に載っている高木賢立は次の通りである。

文化 10 年 (1813) 賢立生まれる

明治 3 年 (1870) 服部少参事の新政が始まる。

教諭使による村々巡回が始まる。

明治 4 年 (1871) 領内の巡回を終える。

寺院合併の御下問が出される。

鷲塚での談判が決裂し死者がでる。

明治 20 年 (1887) 賢立死去

(子供が偉人に質問する問答形式)

子供：教諭使って先生のことみたいだけど、本当はどんなことをする人なんですか。

賢立：簡単に言えば教師だよ。明治新政府となり農民達に対して、将来の生活設計と村を盛んにすること、それに子どもや孫の教育をしっかりして、後世まで家を継いでいくことを、分りやすく説明して聞かせたんだ。

子供：どうしてそんなことをする必要があったんですか。

賢立：当時始まったばかりの服部少参事の新しい政治の考え方を、領内の農民達によく分らせるためだよ。教諭使に選ばれたのは、私のいた光輪寺ともう一つ称名寺の二人だった。

子供：賢立さんの日記にその頃のことが書いてありましたね。

賢立：二ヶ月余りで領内を回り終えるまで、私は政治と仏教をうまく結びつけて話をして来たつもりだ。

農民達もよく分かってくれた。けれど、ある時私の話を非難する人に出会って、私は不満ながらも説法を変えなければならなくなってしまった。仏法の話が出来なくなったんだよ。

子供：それで、農民が怒ったんですね。

賢立：農民だけでなく、僧俗の中にも光輪寺に不信感を持つ者が現れるようになって、服部政治が反感を持たれるようになったんだ。

子供：信頼を取り戻すために何かしたんでしょう。

賢立：それが益々悪い方向へ行ったのさ。神道を重視していた服部が急に仏教に干渉し始め、寺院合併をしようとしたんだ。そうでなくても動揺している僧侶たちだったから、これで一気に騒動が始まってしまった。

子供：それが鷲塚騒動なんですね。

賢立：その通り。けれどこの騒動の裏には、当時禁止されていたキリスト教への民衆感情や服部政治に対する以前からの思いもあったようだね。

子供：事件はどんなふうになつたんですか。

賢立：話し合いはうまく進まなかった。そして結局死者を出してしまったよ。何人もが逮捕されて裁判を受け、二人が処刑された。私の教諭がこの事件に関係

していると思うと、心苦しいよ。

(2) 教諭使とは

碧南市史第2巻から抜粋

明治維新において、菊間藩大浜出張所の責任者に着いた服部少参事は、管内の民衆に新政の内容を徹底させるために、明治3年11月5日に光輪寺賢立と称名寺説問の二人を教諭使に任命した。

その教諭内容は役所から書き出された次の三か条をやさしく教えさとすことになった。すなわち、

- 一、過去ノ事ヲ計リ以来ノ法ヲ立ツル事
- 二、貧民ヲ救ヒ衰村ヲ興ス事
- 三、子孫ヲ教エ家名永続ノ法ヲ組立ツル事

又、「村々へ申し渡すべき覚え」「叡慮之趣申諭覚」「村法改正之覚」等を人民に説諭し、私意をまじえず、むつかしいところは譬諭をまじえて教示した。教諭使の村々巡回は明治3年12月5日から始まって、翌年2月3日に終わっている。わずか三ヶ月の短期間に大浜出張所管内全域を28回に分けて教諭している。これをみても服部少参事が政治改革を下々のものまで、急ぎ徹底させようとしていたかが分かる。

教諭使の巡回状況

年月日	村名	場所	立会い者	備考
明治 3.12.5	大浜下之切	称名寺	小笠原甚太郎	
3.12.6	大浜上中之切	西方寺	片山五兵衛	
3.12.7	天王、道場山	天王新民塾	小笠原甚太郎、 岡本八二郎	午前
〃	鶴ヶ崎、松江	古居七兵衛	同上	午後 夜雨鶴ヶ崎一泊
3.12.8	田尻、久沓	専興寺	片山五兵衛、岡 本八二郎、石川 一郎	午前
〃	千福、浜尾	精界寺	同上	午後
4.1.13	棚尾本郷	光輪寺	小笠原甚太郎、	午前男子、午後女子

			山中七一郎	
4. 1. 14	棚尾本郷、前 浜新田	安専寺	片山五兵衛、山 中七一郎	
4. 1. 17	平七、東浦、 中山	東正寺	片山五兵衛、片 山俊治郎、山中 七一郎	午前
同上	伏見屋、流作	伏見屋新民塾	同上	午後
4. 1. 18	西山、東山	西山鳥居新六	小笠原甚太郎	午前
同上	二本木、荒子	二本木講堂	小笠原甚太郎	午後
4. 1. 19	神有	応春寺	石川一郎	午前
同上	鷺塚	蓮成寺	石川一郎	午後
4. 1. 23	小柳	恵琳寺	石川一郎	午前
同上	寺津村	明光寺	石川一郎	午後 村会所一泊
4. 1. 24	横須賀村	称名院	石川一郎	村会所一泊
4. 1. 25	横須賀村	横須賀村会所	石川一郎	
4. 1. 28	新中根村	隋巖寺	片山俊治郎、鍋 田与平	午前
同上	赤松村	本楽寺	同上	午後 本楽寺一泊
4. 1. 29	新堀村上条村	光善寺	深見十代十、鍋 田与平	深見太一郎宅一泊
4. 1. 30	新堀村上条村	光善寺	同上	午前
同上	鴛鴨村	安福寺	同上	午後 安福寺一泊
4. 2. 1	西田新郷	阿弥陀寺	同上	午前
同上	古中根、若林	真浄寺	同上	午後 寺田伝一郎宅 一泊
4. 2. 2	花園村	寺田伝一郎	同上	午前
同上	西境村	長善寺	同上	午後
4. 2. 3	役所へ教諭一 先ず相済みの 届けをなす。			

(3) 鷺塚騒動と光輪寺

概要を碧南事典から抜粋

「明治4年3月(1871)鷺塚村において、菊間藩大浜出張所の役人と、真宗の僧侶や農民との間に激しい争いが起きた。菊間藩事件とか、大浜騒動或いは鷺塚騒動と呼ばれる。

明治政府の神仏分離の政策は、廃仏毀釈の運動となって全国に広まっていった。明治3年に大浜陣屋の少参事になった服部純は天排(歴代天皇)、日拝(天照大神)を強要させ、寺院の統廃合を進めようとした。維新の変動の中で、仏教、特に浄土真宗を守ろうとする東本願寺の僧で結成されていた三河護法会の有志は、菊間藩の政策が他の藩に及ぶことを恐れた。そこで藩の方針に賛成した西方寺や光輪寺を説得し、陣屋の役人と話し合うため行動を起こした。……」

(4) 漢詩

明治時代には、漢詩をたしなむ人が多かった。棚尾では、名倉秀本(石雲)、高木賢立、杉村修平、永坂奎兵衛、佐野松雲などである。

7 十世晃敬(こうきょう)の先見性

明治2年生まれ～昭和4年没

(1) 「革新運動日誌」

「三河の真宗」発行：真宗大谷派三河別院 昭和63年4月から抜粋

宗教改革運動に功績の晃敬

高木晃敬は、明治時代に清澤満之等の提唱した浄土真宗の宗教改革運動に加わり、現在でも貴重な文献となっている「革新運動日誌」を残した。高木晃敬等が三河において参加した宗教改革の動きは京都ではその事務所が最初京都の北白河におかれたので白河党宗教改革運動といわれた。

日誌によると、明治30年7月22日晃敬は清澤満之から同盟会本部に入り、幹事を助けてほしい旨依頼されている。この要望は自坊の都合で断っているが、当時28歳の晃敬は満之等から信頼されていたことがうかがわれる。

(2) 碧南市における写真の先駆者

晃敬は写真を近隣ではいち早く取り入れた人としても有名である。明治25年頃彼が撮影した初代棚尾橋、湊橋、塩田、医学解剖局、衣浦造船所、警察大浜分署、権現崎傘松などは、碧南市の最初の写真として、貴重な郷土資料となっている。

又、幻灯機を作ろうとしたが、光源に苦勞した。そこで東京に出て研究した上、ブリキ屋を指導してアセチレンのタンクとガス管を作らせ幻灯機を完成した。そして近隣はもちろん幡豆郡までも巡回映写や講演をして歩いた。

(3) 立華

14歳の時、松一色の立華を始めてより苦心研究し松花軒三代目となり、「挿光社」を創始した。その後、時流に乗って挿光社は盛大となり、社員百数十名となった。晃敬は家元より准三房に列せられ「花ノ房」の称号を許された。

大正4年(1915)の御大典を記念して、池坊家元では「橘会」を作った。地方もそれにならい、大正の末、碧海郡橘会が大浜常行院で結成式をあげ、晃敬は会長になった。昭和4年彼の死と共に挿光社は解散した。

(4) 発句

文学雑誌「天界詞藻」は高木晃敬法螺等の棚尾天狗会が発行した発句、狂句、短歌の毛筆雑誌で、明治25年(1892)8月第1集を出し、3集を見たが、これで終わった様子である。

明治文化のさきがけをした、棚尾の天狗会は「天界詞藻」を収録した。発句というが、川柳に近い滑稽なものであった。

「戸障子を うしろであける 鼻天狗」 天狗亭法螺

「身の影を ふみつふまれつ 盆踊」 高木法螺

(5) 掘亀橋記念碑の銘文を書く

掘亀橋は蜷川に架かる市道志貴崎橋の昔の名前で、棚尾村の有志によって架けられ、記念碑が光輪寺にある。住職の高木晃敬は碑文を書き、和歌で「世のために つくすまことや 句うらむ いく萬代も 名残とどめつ」と功績を讃えた。

8 十一世真敬と俳句

(1) 俳句

十一世住職高木真敬(しんきょう)は俳句に造詣が深く、永井賓水の主宰する俳誌「アヲミ」に属し自らも俳号を二九と称し、「本堂は 山の如しや 日短か」の句碑がある。

又、光輪寺は大正11年に巨匠高濱虚子が句会に訪れ棚尾俳壇隆盛の場所になった。この時虚子は当時境内にあった立派な山茶花を見て、「山茶花の こぼるる姿 眺めけり」と詠んでいる。

(2) 公益事業

ア 大正6年真敬は光輪寺の庫裏を開放して「棚尾幼稚園」を開設し多くの幼児を保育した。平岩慶一氏も通園したことを語ってみえた。

昭和6年に国道拡幅のため庫裏が移動し狭くなり休園となる。

イ 棚尾日曜学校（又は棚尾修養会）

本堂を開放

事業別 宗教教育

大正9年創設

ウ 農繁期託児所

昭和4年開設 6月5日～7月2日 午前8時～午後5時 62名

経営主体 棚尾方面委員助成会 保母4名

(3) 蔵書の寄贈

昭和49年2月 図書館へ蔵書790冊を寄贈

(4) 野球チーム結成

明治末期県立二中（岡崎高校）の野球選手枝七五郎をコーチに招聘し、真敬を始め、赤堀清治、安藤敏雄、長田秀吉、斎藤辰五郎、鈴木嘉太郎、田淵武一、長崎勤等で「弥生倶楽部」というチームを結成した。当時は対戦相手がなかなか見つからなかったらしい。

9 年中行事

報恩講 11月9～10日

10 札の辻

光輪寺は棚尾の中心地にあるので、お寺の道路交差点部は、昔からお触書などを掲げた高札が立てられ、「札（ふだ）の辻」と呼ばれていた。現在、棚尾公民館に移動した高札舎は、毘沙門通りが拡福される昭和6年まで、ここにあった。